

- 1 派遣期日 平成28年 8月 1日(月)
- 2 研修先 学校名(会場名) 筑波大学附属小学校
所在地 東京都文京区大塚3-29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp>
- 3 研修内容

第59回筑波学校体育研究会夏季研修会
体育授業におけるアクティブ・ラーニングー不易と流行を考えるー

- (1) 研究授業Ⅰ 筑波大附属小学校 齋藤 直人先生

研究主題：体育授業におけるアクティブ・ラーニングとは何か。
～「資質・能力」と「教育内容」を繋ぐ「方法」として～

【今回の授業のポイント】

- ①体育授業における主体的・協働的に学ぶ学習とはなにか。
→1年生の発達段階において「課題の発見」は難しいと考える。実際には、教師側が提示した運動ができるようになる(課題の達成の)ために、主体的・協働的に学習していく授業が自然ではないか。
- ②体育において必要な「資質・能力」を身につけさせる学習方法とは何か。
→体育における資質・能力の1つとして「動ける体」があるが、この動ける体につながる課題が共通であれば、全員がアクティブに学習していくのではないか。課題が同じだからこそ、協力して働くこと、つまり協働的に学ぶ意味が生まれる。

つまり…「充実した運動学習場面+意味のある思考場面」を意識することで、授業は「アクティブ」になっていくと考える。

- (2) 研究協議会

提案授業の反省、提案授業に対する質疑・応答

- ・授業者が考える「アクティブ・ラーニング」とは？
必ずしも新しいものである必要はない。→やや「アクティブ」でもよいのではない？
自分の中で「ここがアクティブである。」という明確な視点を持って指導に当たることが大切である。

- (3) 講演「体育授業におけるアクティブ・ラーニング『不易と流行を考える』にあたって」
桐蔭横浜大学 佐藤 豊先生

○新学習指導要領の動向としては
学習する知識・技能を単に暗記や習得のレベルで捉えるのではなく、必要感や実感を伴い「腑に落ちる」というイメージの「深い学び」や「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び＝アクティブ・ラーニング」の必要性がある。

○体育学習に置き換えると
技能、態度、(知識)思考・判断が保証された授業が「アクティブ・ラーニング」なのではないか。

【児童の学びや考える時間の確保】

体育科において、技能を身につけることは大切であるが、それだけを強調せず、児童の学びや考える時間の確保が大切である。

【できる喜びが味わえる授業】

活動を児童の自主性に任せることも大切だが、任せすぎて体育科の核である「できる喜び」が味わえないような学習活動ではいけない。

○結論として

- ・カリキュラム・マネジメントとアクティブ・ラーニングをセットで捉える必要がある。
- ・体育科においては、技能、態度、（知識）思考・判断のバランスのよい育成と評価が保証されている授業が望ましい。
- ・深い学び、対話的な学び、主体的な学びが重層的に保証される教材の開発が必要である。
- ・資質・能力の育成に向けた体育の役割（多様性、インクルーシブ、価値）を意識した学習活動が必要である。

(4) 実技講習Ⅰ 陸上運動への動きづくり 名古屋市立高木小学校 坂野 由彦先生

- ・「分かる」がある授業づくりのために
- ①よい動きを見付ける場面を取り入れる。
- ②よい動きをまねる活動を取り入れる。
- ③よい動きをまねてみてどうだったかを振り返る場面を取り入れる。

(5) 実技講習Ⅱ ゴール型(小学校3・4年生)魔王ゲットゲーム 天理大学 木下 光正先生

- ・「全員参加」の授業は質を落とすのではない。できる子はさらにレベルアップできる。
- ・ユニバーサルデザインの視点はオリジナルのものを作ることが大切である。目の前の子供の実態をきちんと把握し、ねらいを明確にとらえて、手立てを考えていく。一時間の授業をきっかけとして好きになれる、動き出せるような子どもを育てることが大切である。

(6) 実技講習Ⅲ マット運動「連続技づくり」 一側方倒立回転を核として一

元・筑波大学附属小学校 林 恒明先生

- ・「アナログン」から連続技づくりまでの指導

4 感想

今回の研修では、体育科において何が「アクティブ・ラーニング」なのかを、研究授業・講演・実技講習などを通して学ぶことができ、大変有意義であった。提案授業では、1年生の段階における「アクティブ・ラーニング」の捉え方と実践について的一端を見ることができ、これまでと同じような活動や展開であっても、教師の視点や捉え方で児童は主体的・協働的な学びを得るのだと感じた。その中でもやはり、教師の言葉かけや視点の与え方、場の設定の仕方などが大切であることが分かった。実技講習では、実際に各種の運動を行いながら、どんな場面に「アクティブ・ラーニング」を取り入れていけばよいのか、どういった活動が「アクティブ・ラーニング」になり得るのか、などを体験できた。それ以外の面でも、実際の活動例や指導例を体験でき、有意義であった。「アクティブ・ラーニング」という新しい言葉だけに惑わされるのではなく、体育科の根幹にある体を動かす楽しさやできる喜びを損なわずに、不易と流行を考えながら体育学習を進めていく必要性を感じた。児童の実態に合わせ、どの場面で主体的・協働的な活動を取り入れていくことが有効なのか、研修で学んだことを日々の授業の中で実践していきたいと考える。今回の研修の機会をいただいたことに感謝すると共に、今後もさらに研修し、教育活動の充実に生かしていきたい。